

北魏洛陽にみる仏教と西王母神仙思想

服部克彦

一 仏教と西王母神仙思想の關係

さきに第十八卷一号で「北魏洛陽仏教寺院にみる神仙思想の影響」と題してのべ、そこでは東方海洋における蓬萊山神仙思想に重点を置いたので、今回は西方山岳よりの崑崙山西王母神仙思想についてのべてみたい。もともとこれらの神仙思想は古くから中国人のもつていた思想の一つの柱で、歴史上に顕著なかたちで取り上げられるのは、これらの思想に強い関心を示した秦の始皇帝(B.C. 221-210)や前漢の武帝(B.C. 140-87)時代からとしてよい。ついで後漢の桓帝(A.D. 147-167)の世になるが、この人もさきの二帝と同じく神仙信仰が深いことで有名で、『後漢書』の帝紀や祭祀志により明らかである。

さて、前漢の武帝が東西文化交流のシルク・ロードを開き、やがて後漢の頃に印度・西域諸国から新文化として仏教が伝へられる。これら西方文化は中国の人々にとつては未だ

接したことのないものばかりで大いに注目された。ところでこれらの中に中国において古くから考へられた、西方山岳神仙である崑崙山西王母神仙思想はどのようなかたちでおりこまれていたものであろうか。つまり西方山岳神仙思想は早くから中国人の関心を示したものであるが、これらの実際については全たくつかみどころのないものとしてよかつた。そのような状態のままにシルク・ロードの開通があり、『史記』大宛伝・条枝によると「条枝有弱水西王母、而未嘗見」とあり、今の新疆省于闐河上流域に崑崙山があり、西王母神仙の住んでいたことを伝へている。しかしこれも確認されたものでなく、実にあやふやなものとしてよい。ついで『漢書』の地理志によれば、西王母神仙の居住していた崑崙山について、今の甘肅省安西県附近や青海省西寧県附近ともしている。要するにそのすべては、今のヒマラヤ山脈につらなる外辺の山地、つまり崑崙山脈を出でないことがわかる。もともと中国の人々が西方奥地に無限に重畳する山岳に神秘感をい

だき、初めは西方の深山を漠然と渾沌・崑崙と称し西王母神仙の存在すらあまいなものであった。そこにシルク・ロードの開通により西方からの須弥山伝説が伝わり、これら両者が合体して楽土伝説や河源伝説が形成されたものと考へられる。ともあれ漢代になり西方シルク・ロードの開発と共に、中国の人々にとつて新しい楽土伝説がもたらされたことも否定することはできない。これらについては新文化としての仏教の影響が強くはたらいており、またそれにより中国在来の神仙思想の側でも新しい動きが生じたとしてよい。このような両者の関係はその後ながい間にわたり、陰になり陽になりして縄のあざなえる如き関係をたどることがわかる。

二 仏教寺院と西王母神仙に關係した果樹・珍木香草

北魏洛陽時代(A. D. 430-534)にみる仏教寺院の特色の一つは、果樹園や珍木香草に代表される苑池のすがたである。これら果樹園の果物や珍木香草の中に、仙人とか西王母の名称のあつたことに注目したい。それらの中でまず『洛陽伽藍記』巻一にある瑤光寺をあげてみたい。

瑤光寺、世宗宣武皇帝所立。……………有五層浮圖一所、去地五十丈。仙掌凌虛、鐸垂雲表、作工之妙、埒美永寧。珍木香草、不可勝言。牛筋狗骨之木、鵝頭鴨脚之草、亦悉備焉。

ここでまず仙掌凌虛の語が出てくるが、この仙掌とは仙人

北魏洛陽にみる仏教と西王母神仙思想(服部)

掌をさし、五層浮圖の最上部をさしている。これは浮圖の裝飾物であるが、ここではそれが仙人掌の表現をとつている。当時の仏教寺院の象徴である五層浮圖において、最上部の裝飾物を仙人掌という中国神仙思想の語で表現したのは、そこにそれなりの理由があるとみてよい。この仙人掌については、前漢武帝により造られた通天台からの影響のあることがわかる。彼が陝西省淳化県の西北にある甘泉山の故甘泉宮中に、通天台と称した高層樓を造つている。『史記』の封禪書には「公孫卿言、神仙好樓居、乃作通天臺」とあり、『三輔黃圖』巻五には「通天台、……去地百余丈、望雲雨悉在其下、望見長安城、武帝時祭泰乙、……人升通天台、以候天神、……上有承露盤、仙人掌擎玉杯、以承雲表之露」としている。仙人掌とは仙人が掌をもつて盤をささげる形に象り、甘露を受けるように作つた器物をさす。それではなぜ甘露を受ける承露盤が必要であつたかというに、甘露は天下が太平になると降るとされ、『漢書』宣帝紀に「元康三年(90)、甘露降未央宮、大赦、以甘露連降、改年為甘露」とあり、その意味するところがわかる。前漢武帝の神仙信仰は色々なかたちでもつて引つがれ、仏教が伝来してくるとその思想の中に神仙性を見出し、これと混在してゆくことになる。甘露にしても、中国在来の思想とは別に甘露法爾・甘露王の名が見える。甘露法爾とは仏の教法をさし、如来の教法を甘露の雨に

喩へている。また甘露王は阿弥陀仏の別号で、阿弥陀仏の化身説法して甘露の雨を注ぐ徳を称している。つまり仏教の説明をするのに、中国在来の神仙思想にかりていたことがわかる。

さて、珍木香草の類については、牛筋狗骨の木からみるに、これは牛筋と狗骨の二種の木をさしている。牛筋の方は弓弩の幹を造るに用いるもので櫓とも呼ばれ、明の李時珍の『本草綱目』に「健如牛筋、曰牛筋」と示している。

ついで狗骨の木は枸骨ともいわれ、唐の陳藏器『本草拾遺』には「女貞似枸骨、枸骨樹如杜仲、皮堪浸酒、補腰脚、令健。木肌白似骨、故云枸骨」とある。この狗骨は枸杞をさし、地骨・枸棘とも称された。さきの『本草綱目』枸杞・地骨皮の条には、天精・地仙・仙人杖・西王母杖などと呼ばれている。薬用として珍重された枸杞が、中国在来の神仙思想により仙人杖や西王母杖とされ、そこに西王母神仙に対する強い信仰が感じられる。しかもそれが仏教寺院において、薬用植物として珍木香草の中に教へられていた点である。

ついで鶏頭鴨脚の草も鶏頭と鴨脚の二草をさしている。まず鶏頭はおにばすの実とされ、『淮南子』卷十六、説山訓の条には「鶏頭已瘻」とある。瘻とはるいれきで、類にできる腫物や久しく癒えぬかさをなおす力があるとされる。また鴨脚の草は鶏頭の異名とも鴨脚葵ともされる。この鴨脚葵も

「本草」にとりあげられ、中国では早くから薬用になつていた。

さて、つぎは果樹について同じく『洛陽伽藍記』卷一、景林寺の条によつてみたい。

景林寺、在開陽門内御道東。……………寺西有園、多饒奇果。春鳥秋蟬、鳴声相統。……………景陽山南、有百果園。果別作林、林各有堂。有仙人棗、長五寸、把之兩頭俱出、核細如鍼、霜降乃熟、食之甚美。俗伝云出崑崙山、一曰西王母棗。又有仙人桃、其色赤、表裏照徹、得霜乃熟。亦出崑崙山、一曰西王母桃也。

景林寺の果樹園には奇果が多いとするが、その内容は詳かでない。ところがついで宮闕内百果園の奇果がのべられている。これは景林寺果樹園の奇果の類が、宮闕内百果園のもので代表されたものとして論をすすめてみる。

まず仙人棗で一種不思議な棗であることがわかる。大きな、熟する時期や美味など、人々はこれを西方崑崙山に生じた西王母棗と呼んだ。棗は早くから神仙思想とのむすびつきがあり、『史記』封禪書にも「太一所用如雍一時物、而加醴棗脯之属」として醴・脯と棗が太一に供せられたことがみえる。

ついで仙人桃についてみるに、これも仙人棗と同じく不思議な桃果であつた。やはり西方の崑崙山に生じたものといひ、西王母桃の名で呼んでいる。また桃に關しても早くから

神仙思想とのむすびつきがあり、桃印・桃板・桃皮・桃酒・桃符などがそれである。桃印についてみると、漢代に夏至の日に門戸に施して悪気をとめたもので、桃木を用い面に文字を書いたもの。桃板は仙木ともいわれ、桃の木で作り吉祥を祈るふだで、元旦に之を門に懸けたとされ『荆楚歲時記』に

「正月一日造桃板著戸、謂之仙木」とある。なお桃のことを仙果といわれるが、桃は西王母神仙など仙人との縁が深いからである。西王母神仙との関係では寿星桃があり、西王母の果樹園にあり三千年に一回実をむすび長寿の秘薬といつてよい。また『列仙伝』によると「漢元封元年(B. C. 110)、西王母降武帝殿、進蟠桃七枚於帝」とあり、東海の仙山にある大きな桃の実を蟠桃といい長寿にあやかっている。なお仙桃が崑崙山の西王母の園で生じたことから崑崙桃の名があり、『本草綱目』桃の中で「時珍曰、冬桃、一名西王母桃、一名仙人桃、即崑崙桃、形如苦蕒、表裏微赤、得霜始熟」とあるのは百果園の仙人桃のことである。

ところで当時の仏教寺院にある果樹や珍木香草の類が、神仙思想や本草関係とのつながりの強かったことについて、その意味あいをたずねてみたいと思う。

仙人杖(西王母杖)・仙人棗(西王母棗)・仙人桃(西王母桃)は西王母神仙とのむすびつき、またその他のものも本草関係により同一範疇にあつたものとしてよい。これはもともと中

国の神仙思想と本草関係とが同一の範囲内において働いていたことを示すものであろう。なぜならば中国本草の確実な出发点としては、『漢書』卷九十二、樓護伝をあげることによりその凡よそがわかるとしてよい。

樓護字君卿、齊人。父世医也、護少随父為医長安、出入貴戚家。護誦医經、本草、方術数十万言。

ここにある医經とは医術をさし、本草とは薬術、方術とは方技をいうのである。方術・方技・方士の方はいずれも医薬のことから出ていて、やがてこれが神仙思想とむすびつき、単に疾病を治療する医薬のことに限らず、やがて進んで長生不死を得る薬方にまでも発展することになる。仙薬としての仙人杖(西王母杖)・仙人棗(西王母棗)・仙人桃(西王母桃)は西王母神仙を介しての長生不死の薬方になつたものになつてくる。しかもこれが当時の仏教寺院において用いられていることは、仏教と神仙思想との交わりを示す一つの例としてよい。しかも西王母神仙の思想については、シルク・ロードを介して伝来した仏教との間に地理的にも密接であつたことが考へられる。つまり仏教がこのルートを通じて伝播してきたものであるが、そこには須弥山伝説・崑崙山西王母伝説などの楽土伝説が生まれてきていた。このようなかたちで北魏洛陽時代にいたるが、当時の中国思想界には、これらが混在したままであることを示したのとしてよいであらう。